

二番目に悪いのは、いったい誰でしょう？

いじめについていろいろと考えたり、親子で話したいと思ったりした時、絵本が大きな助けになることがあります。また、絵本が実際に身近なところでいじめが起こった時の考え方や対処法のヒントを与えてくれることもあります。そこで、大人にとっても、子ども(小学生以上)にとっても大いに参考となるような絵本を紹介します。

それは、2014年に出版された、林木林さん作・庄野ナホコさん絵の『二番目の悪者』という絵本です。

【出版社からの紹介(あらすじ)】

金色のたてがみを持つ金ライオンは、一国の王になりたかった。自分こそが王にふさわしいと思っていた。
ところが、街はずれに住む優しい銀のライオンが「次の王様候補」と噂に聞く。
ある日、金のライオンはとんでもないことを始めた――。
登場するのは動物ばかり。人間はひとりも出てきません。
けれど1ページ目はこの言葉から始まります。
「これが全て作り話だと言い切れるだろうか」



『二番目の悪者』
林木林 作・庄野ナホコ 絵
(小さい書房)

金のライオンが、自分が王になろうとして始めた「とんでもないこと」とは、銀のライオンをおとしめるために悪いうわさ(根拠のないデマ)を流すことなのです。最初、住民の動物たちはうわさを信じようとしませんでした。しかし、住民から住民に伝えられるにつれて、だんだんうわさが本当のこのように語られ広まっていきます。一方の心優しい銀のライオンは、自分に対する悪いうわさの存在を知っても何も言わず、誤解がとけるのをじっと待っていました。そして、物語はとうとう取り返しのつかない結末を迎えることになるのです。

これは、金のライオンだけが悪かったのでしょうか？はたして二番目に悪いと考えられるのはいったい誰なのでしょう？

絵本の表紙帯には、作者からのメッセージである「考えない、行動しない、という罪」とあります。あやふやな情報がネット上で飛び交う今の社会の中で、何が真実なのかを自分で見極めて行動することがより一層重要となっています。さらに私たちは、悪意に対して空気に流され、無関心・傍観者でいられるのでしょうか。うわさが出た時やいじめに気づいた時など、自分自身の振る舞い方として、どうあればよいかを大人と子どもが一緒になって考えてみたいものです。